徳島県木頭村の方言アクセントについて

上　野　和　昭

On the Pitch Accent in the Dialect of *Kitō* Village, *Tokushima* Prefecture

UENO Kazuaki

キーワード：徳島県木頭村・垂井式アクセント・アクセント変化・動詞アクセントの類推変化・アクセント史

0.はじめに
1.木頭村年配層における体言のアクセント体系
2.木頭村若年層における体言のアクセント変化
3.木頭村若年層における動詞のアクセント変化
4.木頭アクセントの成立
5.おわりに－アクセント史における意義など－

0．はじめに

四国山地の東端，徳島・高知県境の那賀川上流域に木頭村(キトウソン)がある．現在，世帯数約800，人口2,300余を数えるが，戦前までは山間の秘境といわれ，国道195号線が開通し交通が便利になったのは戦後のことに属する．徳島県とはいいながら高知県側との交流も古来あったようで，徳島市からは100kmほど，那賀川河口の阿南市からでさえ80kmあまりの距離を隔てるうえに，そこに至るには奥深い丹生谷(ニュウダニ)を遡らなければならない．産業は「木頭杉」で知られる林業を主としている．(『角川日本地名大辞典』36徳島県 1986 による)

この地域の方言アクセントは，京阪式がその型の区別を少なくして，2拍名詞ならば2・3類のほかに1・4類も統合したものといわれる．このようなアクセントは広く四国中央部の山間地帯に分布し，徳島県下でも讃岐式の分派とされる三好郡山城町(南部以外)・池田町出合地区・一宇村などを除いて，西南

部の山間(東・西祖谷山村，木頭村，木沢村，上那賀町の西半など)ほとんどに聞かれることが報告されている.[1]

木頭村のアクセントについて，いちはやく報告したのは，生田早苗(1951)である．生田は同時に東祖谷山をも調査して，両者とも生田のいわゆる「C型アクセント」(p.281，pp.287-288，表II)に含めている．ところが，この型に属するとして報告された地点(木之本・新宮・串峠など)はみな2拍名詞ならば1・4類が統合した音調は一般の助詞付きで●●●とされるのに対して，東祖谷山だけは○●●となる．これは，続いて調査した森重幸(1958)も同様に報告している(音調レベルでの高拍を●，低拍・下降拍をそれぞれ○◐であらわす．以下同様)．このことからわかるとおり，「垂井式」と総称される他地域のアクセントの場合とは，東祖谷山や木頭のアクセントはわずかながらその音調を異にしているのである．しかし，アクセント体系としてみれば，近畿中央式から高起・低起の式の区別を失う方向に変化しているという点では共通している．

本稿では，地域を木頭村に限って調査結果を報告するが，生田・森の調査報告とは部分的に異なるところもある．また，木頭村年配層のアクセント体系や若年層における変化から，木頭村のアクセントを中央式からC式への過渡的段階にあるものと考える．さらに，中央式との対応からアクセント史上の意義についても言及する．

ここに報告する調査は1992年7月に行ったもので，次の方々の御協力を得た．生年と出身字名とを添えて御氏名を掲げ，御礼申し上げる．(敬称略)

年配層　一香　一夫（1902年生，出原）　松葉登代子（1925年生，出原）
上元　福光（1927年生，折宇）　西沢　圭市（1929年生，出原）
森口サチ子（1930年生，北川）　古富　節子（1931年生，和無田）
榎谷喜久子（1935年生，和無田）　和田　陽次（1939年生，北川）
折上　常隆（1944年生，北川）
若年層　熊森　優美（1978年生，南宇）　新田　東平（1978年生，出原）
早川さなえ（1978年生，南宇）　松本　幸恵（1978年生，出原）
丸山　宏樹（1978年生，出原）

なお森(1958・1982)は，北川などで2拍名詞第1・4類が助詞付きで○○●となることから「北川・小祖谷型」を別に立てるが，ここに報告する調査からそのような音調はとくに聞かれなかったので，いまは北川地区出身の方々も一括

(1)　森重幸(1958・1982)

して扱うことにする.

1．木頭村年配層における体言のアクセント体系

筆者は，木頭村年配層に聞かれる体言のアクセント体系を，近畿中央式から下げ核の位置はそのままに，式の対立を失いつつある過渡的状況であると解釈したい.[2]

まず1拍名詞は単独では2拍なみに発音されるのがつねであるが，第3類相当の語単独の音調は○●ないし○○であるのに，第1類相当の語は●●であり，ときに語頭から中程度の高さにも聞かれる.第2類相当の語は明らかに●○(下降調)である．さらに，うしろへ高平に続く「この」や「よい・ない」などの語を前接させると，「この子」○●●，「この木」○●●などと後者の低起性が消えるかと思えば，一方で「(気だての)よい子」○●●，「(枝の)ない木」○●○のように式の区別を保つこともある．また，「子も・木も」は●○が普通であるが，年配層には「木(キー)も」に○●○の音調も聞かれる.

2拍名詞については，第1類相当の語単独の音調は○●であって，第4類相当の語と同じように聞こえる.(一般の助詞付きでも，ともに○●●)さらに「この」などを前接させた場合，後者に多く語頭を低くする傾向があるように思われる．第5類相当の語は調査したもの13語(うち「窓・声」は●○になる．残る11語は【表2】と同じ)であるが，比較的高齢の人には半数近くの語に○◐の音調が聞かれた．また，これらの語頭の低起性は，同様に検証したところでは保たれているものと思われる.

3拍名詞の場合はやや複雑であるが，単独で主に○●●に聞かれる第1・6類相当の語でも，「この着物」○●●●●，「この兎」○●○●●などの場合には，違いが出ることが多い．ところが，第2・4・7類相当の語は単独で○●○の音調に聞かれるが，第7類相当の「この畑」などの場合はほぼ○●○●○に落ち着いているけれども，第2・4類相当の「この娘・この男」では○●●●○，○●○●○両様に発音される．第3類相当のもののうち単独で○●○に発音されている「小麦・力」などもこれと事情は同様である．すなわち，近畿中央式で低起性を備えている第6・7類については，ここでも低起性を残しているのではないかと考える.

体言についての以上の考察からすると，木頭村の年配層のアクセント体系は【表1】のようにまとめられる.

---

(2) 上野善道(1987 pp.53-54)の垂井式アクセントについての記述を参照.

【表１】木頭村年配層のアクセント体系

L3 ／													/キツネモ	⌊○	○	○˥	○
L2						⌊○	○˥	アセ/アセガ	⌊○	○˥	○	ハタケ/ハタケガ	⌊○	○˥	○	○
L0	⌊○	キ/キガ	⌊○	○	ソラ/ソラガ	⌊○	○	○	キツネ/キツネガ				⌊○	○	○	○
0	○	コ/コガ	○	○	トリ/トリガ	○	○	○	キモノ/キモノガ				○	○	○	○
1	○˥	ナ/ナガ	○˥	○	オト/オトガ	○˥	○	○	ココロ/ココロガ				○˥	○	○	○
2					/ハナモ	○	○˥	○	カタナ/カタナガ				○	○˥	○	○
3									/キモノモ				○	○	○˥	○ ／

ここでは低起性はなお残っているものと認めるが，高起性はすでに消えている．したがってこれを無標とし，低起性が有標となる．しかし問題は／○○˥○／の場合，「この刀・よい刀」などに○●●●○と○●○●○とが聞かれることである．式を失う方向に進んでいるところに，このような低起式を獲得したかのような音調が聞かれるのは理解に苦しむが，これら第２・４類相当の語は単独で○●○に発音されるのが普通であるから，後者の○●○●○は「この」と「刀」と二つに分けて意識された音調かもしれない．

なお，４拍以上の体言は未調査．また，３拍以上の語で語末が下降拍になるものについては，今回の調査からは不明である．

ところで，森(1958・1982)では，３拍名詞第１・６類の音調を助詞付きで●●●●と報告している．これについて今回の調査では，いずれも代表的音調は○●●●と聞かれた．また，森が第４類相当を●●○○とし，第７類相当を○●○○とするのは，この両者が統合していないことを示唆するのであろう．しかし，今回の調査で得られた結果からすれば，第４類相当の語の音調は○●○○であって，それだけでは第７類相当の語との間に音調的相違は認められなかった．

もっとも，森がこの種の代表地域としてあげた上那賀町平谷では，第１類相当の語に助詞付きで●●●●，第４類相当の語に同じく●●○○などと語頭から高い音調も聞かれる．中井幸比古(1990 p.8)によれば，京都府下の垂井式アクセントでは，語頭の音調は相当不安定であるというから，語頭から２拍以上高拍が続くことがないという音調的特徴は木頭村にのみ顕著なのであろうか．

２．木頭村若年層における体言のアクセント変化

若年層では２拍名詞第５類相当の諸語に変化が著しい．すなわち単独で○●(年配層では○◐にも)，助詞付きで○●○から，単独●○，助詞付き●○○へ

と変化が進んでいる．

今回若年層として調査したのは，木頭中学校生徒(調査時第２学年)男子２名，女子３名の計５名である．２拍名詞第５類相当の語として調べたのは，【表２】に示す11語．単独の場合と一般の助詞付きの場合に聞かれた音調を以下に示す．なお表上段の(　)内は性別，#印は変化後の音調に付したものである．

これらの語は，年配層ではいずれも単独で○●ないしは○◐，助詞付きで○●○と発音されているもので，それらが若年層で●○，●○○へと変化しつつあることが明らかである．

第５類相当の語にみられるこのような変化は，第４類相当の語の場合にはさほど顕著ではないが，それでも無視できない数を指摘できる．【表３】参照．一部に＊印で示したような，第５類相当に類推した形跡があるので，型そのものの変化と考えるべきかどうか疑問である．あるいは近隣地域の個別的な影響もあるかもしれないが，いまは明らかでない．ただし，○●，○●●を代表的音調とする第１類相当の語には全くこのような動きはみられない．また，これらの語は年配層ではみな○●，○●●に発音されて例外ないものである．

いま年配層のＬ２型／⌊○○⌉／が若年層で１型／○⌉ ○／へと変化しつつあるものとすれば，中井(1990)に指摘されたＣ式ｆ型からＢ式への変化に類似している．

【表２】木頭村若年層の２拍名詞第５類相当語に聞かれる音調

	K(f)	N(m)	H(f)	M(f)	M(m)		K(f)	N(m)	H(f)	M(f)	M(m)
赤	○●	○●	○●	○●	○●	赤ガ	○●○	○●○	○●●	○●○	○●○
秋	○●	○●	#●○	○●	○●	秋ハ	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○	○●○
汗	○●	○●	○●	○●	○●	汗ヲ	○●○	#●○○	○●○	○●○	○●○
兄	#●○	#●○	#●○	#●○	#●○	兄ガ	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○
雨	○●	○●	○●	○●	○●	雨ガ	○●○	#●○○	○●○	#●○○	#●○○
桶	#●○	#●○	#●○	#●○	○●	桶ガ	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○
蔭	○●	○●	○●	#●○	○●	蔭ニ	○●○	○●○	○●○	○●●	○●○
蜘蛛	○●	○●	#●○	#●○	#●○	蜘蛛ヲ	#●○○	○●○	○●○	#●○○	#●○○
猿	○●	○●	○●	○●	○●	猿ガ	○●○	○●●	○●●	○●○	○●○
春	○●	○●	○●	#●○	○●	春ガ	○●○	○●○	#●○○ ○●○	#●○○	#●○○
蛇[3]	○●	○●	○●	○●	○●	蛇ガ	○●●	○●○	○●●	○●○	○●○

(3)　「蛇」は木頭では「グチナ」というのが普通．

【表3】木頭村若年層の2拍名詞第4類相当語に聞かれる音調

	K(f)	N(m)	H(f)	M(f)	M(m)		K(f)	N(m)	H(f)	M(f)	M(m)
息	○●	○●	#●○	○●	○●	息ヲ	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
稲	○●	#●○	○●	○●	○●	稲ヲ	○●●	○●●	○●●	#●○○	○●●
海	○●	○●	○●	○●	○●	海ニ	○●●	○●●	#●○○	#●○○	○●●
帯	○●	○●	○●	○●	○●	帯ヲ	○●●＊	○●○	○●●	○●●＊	○●○ #●○○
傘	○●	○●	○●	○●	○●	傘ヲ	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
数	○●	○●	○●	○●	○●	数ヲ	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
今日	○●	○●	○●	○●	○●	今日ハ	○○●＊	○●○	○○●	○○●	○○●
肩	○●	○●	○●	○●	○●	肩ガ	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
父	#●○	#●○	#●○	#●○	○●	父ヲ	#●○○	#●○○	#●○○	#●○○＊	○●○
空	○●	○●	○●	○●	○●	空ヲ	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
箸	○●	○●	○●	○●	○●	箸ヲ	○●●	○●●	○●●	○●●	#●○○
船	○●	○●	○●	○●	○●	船ニ	○●●	○●●	○●●	#●○○	○●●

中井はまた，「CB式移動タイプ」として，語単独の場合の方が助詞付きの場合よりも変化が早く起こっていることを指摘するが，木頭にはその傾向はない．それよりはむしろ，第4類相当語の今後の動きが気になる．

ただ，年配層で同じL2型ながら／⌊○○⌉○／の場合は，若年層でもいまのところ1型への変化はほとんど認められない．これらは，そのまま2型として安定するのではないか．そうすると，年配層で語末下降拍をもった2拍名詞第5類相当語についてのみ，助詞付きの場合にも若年層で変化が進んでいるということになるのであろうか．のちにも述べるように動詞命令形「植え」「起き」などは○◐のまま．

3．木頭村若年層における動詞のアクセント変化

一方，年配層から若年層への動詞アクセントの変化は，体系内部の類推的変化であること理解しやすい．まず，年配層の代表的音調の体系を【表4】に示す．なお，2拍動詞第1類1段活用を2V1<1>，同5段活用を2V1<5>などと記す．以下同様．

【表4】木頭村年配層における2拍・3拍動詞の音調体系[4]

	終止・連体形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
2V1<1>	キル	キータ	キン	キロー	キルナ/キナ	キー
着る	○●	●○○	○●	○●●/●○○	○●○／●○	●○
2V2<1>	ミル	ミタ	ミン	ミロー	ミルナ/ミナ	ミー
見る	○●	●○	○●	●○○	○●○／●○	●○
2V1<5>	オク	オイタ	オカン	オコー	オクナ	オケ
置く	○●	●○○	○●●	○●●	●○○	●○
2V2<5>	カク	カイタ	カカン	カコー	カクナ	カケ
書く	○●	○●○	●○○	●○○	○●○	○◐
2V3	オル	オッタ	オラン	オロー	オルナ	オレ
居る	●○	●○○	○●●	●○○	●○○	●○
3V1<1>	ウエル	ウエタ	ウエン	ウエロー	ウエルナ/ウエナ	ウエ
植える	○●●	●○○	○●●	○●●●	○●○○／●○○	○◐
3V2<1>	オキル	オキタ	オキン	オキロー	オキルナ/オキナ	オキ
起きる	●○○	○●○	●○○	●○○○	○●○○／○●○	○◐
3V1<5>	アタル	アタッタ	アタラン	アタロー	アタルナ	アタレ
当たる	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○
3V2<5>	イノル	イノッタ	イノラン	イノロー	イノルナ	イノレ
祈る	●○○	●○○○	○●○○	●○○○	●○○○	●○○
3V3	アルク	アルイタ	アルカン	アルコー	アルクナ	アルケ
歩く	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○

これは，近畿中央式のやや古い体系から，その高起式が語頭を1拍分だけ低くした音調である．いま，木頭村の南の高知市と那賀川下流の阿南市・羽ノ浦町とを取り上げて，[5]たとえば3V1<1><5>について木頭村年配層と比較す

(4) 2V2<5>過去形では，第2拍促音の場合のみ○○●．(「立った，降った」など)「飲んだ・指した」などは「書いた」同様○●○．2V3否定形はオラン●○○にも．3V2<1>意志形はオキョー●○○とも．

(5) 那賀川下流の阿南・羽ノ浦ばかりでなく，中流域や東南の海岸部(海部郡)との関係も考慮すべきであろうが，中流域は未調査のため考察からはずす．
海部郡は古いタイプの中央式として紹介されることが多いが，簡単な予備調査をしてみたところ，やや変化している模様．いまは典型的な古いタイプの中央式である阿南・羽ノ浦と比較する．なお，海部郡とは主に国道193号で通じているが，上那賀町平谷経由となる．

【表5】高知市・阿南市・羽ノ浦町と木頭村年配層との比較（3V1<1・5>）

3V1<1>	ウエル	ウエタ	ウエン	ウエヨ/ウエロー	ウエルナ/ウエナ	ウエ/ウエー
高知など	●●●	●○○	●●●	●●●	●●○○/●○○	●○
木頭	○●●	●○○	○●●	○●●●	○●○○/●○○	○●○
3V1<5>	アタル	アタッタ	アタラン	アタロ/アタロー	アタルナ	アタレ
高知など	●●●	●●○○	●●●●	●●●	●●○○	●●○
木頭	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○

れば【表5】のようである．高知市については，佐藤栄作(編 1989)による．

高知などの意志形ウエヨ・アタロは，ときにウエヨー・アタローにも．ウエローは木頭のみ．3V1<1>の命令形は高知などでウエ●○ながら，やや長くウエーとなれば●●○．2V1<1・5>などもその対応関係は同様である．

また，たとえば「これ書いた」○●○●○と同様に，「これ当たった」などの場合，その音調は○●○●○○となり，語頭の低起性はゆるぎそうにない．体言の場合は，高知などで高起式の語を，木頭では語頭を1拍分低くするのが普通であるが，「これ」などを前接させると，その低さは消えがちであった．ところが動詞の場合はそうはなりづらいようである．

木頭村年配層のアクセントに，高知などのやや古いタイプの中央式アクセントとの対応が顕著であることは以上の説明から明白になったが，例外となる部分もある．次の【表6】は，2拍・3拍動詞について問題ある類を比較したもの．(【表4】を一部補足)

さて，【表6】に#印を付けたところが対応の例外になる．このうち2V2<1>禁止形キルナは，木頭ではふつうキナを用いるので対応しなかったか．禁止の助詞ナは終止・連体形に付くから，この原理で類推すれば○●○は自然な音調である．高知などでは古い終止形●○に続いた形を保存したのであろうが，徳島などでは●●○と新しい終止・連体形に続いた形も聞かれる．

ところが，木頭でキヨー●○○，オラン○●●と発音されることについては説明が難しい．「着る」の意志形は古く「着む(ん・う)」●●であったから，その派生形が高知などでキヨー●●●となるのは，アクセント史からもうなづけるところである．それに木頭で対応するかたちは○●●であり，それが年配層にキロー○●●となって反映している．しかし，同じ年配層にキローではなくキヨーといったときのみ●○○も聞かれる．これはおそらく，あまり一般的でない語形を発音したことも手伝って，2V2<1>意志形ミロー(ミヨー)●○○に類推したものであろう．

【表６】高知市・阿南市・羽ノ浦町と木頭村年配層との音調比較

(2V1<1>・2V3・3V2<1・5>)

2V1<1>	キル	キータ	キン	キヨー/キロー	キルナ/キナ	キー
高知など	●●	●○○	●●	●●●	●○○/●○	●○
木頭	○●	●○○	○●	○●● #●○○(キヨー)	#○●○/●○	●○
2V3	オル	オッタ	オラン	オロ/オロー[6]	オルナ	オレ
高知など	●○	●○○	●○○	●○/●●●	●○○	●○
木頭	●○	●○○	●○○ #○●●	●○○	●○○	●○
3V2<1>	オキル	オキタ	オキン	オキヨ/オキロー	オキルナ/オキナ	オキ
高知など	●○○	○●○	●○○	●○○	●○○○／○●○	○◐
木頭	●○○	○●○	●○○	●○○○	#○●○○／○●○	○◐
3V2<5>	イノル	イノッタ	イノラン	イノロ/イノロー	イノルナ	イノレ
高知など	●○○	●○○○	●●○○	●●○	●○○○	●○○
木頭	●○○	●○○○	○●○○	#●○○○	●○○○	●○○

また，2V3否定形オランは，木頭で高知などと同様に●○○だけであればよく対応する．しかし，ここに○●●も聞かれることに説明を加えなくてはならない．考えられるのは2V1<5>の否定形オカン○●●(【表４】参照)に類推したのではないかということである．2V3は「居る」だけであるから他に類推しても不思議はない．なぜ2V2<5>に類推しなかったのかといえば，それは過去形などに頻用される連用形が一致しないからであろう．

このほか，3V2<1>禁止形オキルナ○●○○は，3V1<1>ウエルナへの類推がはたらいたか．ふつうはオキナ○●○を用いるが，この低起への類推とも考えられる．3V2<5>意志形イノロー●○○○は，イノル・イノッタなどの他の活用形に類推したか．あるいは，●●○○と●○○○とは型の統合を起こして後者にまとまりがちであるから，伝統的な●●○○以外に，過去のある時点，高知などの中央式に●○○○も存在したことを反映するものか．

つぎに若年層の動詞音調体系について，【表７】に一覧する．ここに#印を付けた音調は変化形である．木頭村の若年層では，2V2は2V1に，また3V2も3V1に類推して変化を起こしつつある．その結果として，【表８】のような整理され

(6)　2V3高知などの意志形オロー●●●は，阿南・羽ノ浦．高知ではオロ●○．

【表７】木頭村若年層における２拍・３拍動詞の音調体系

2V1<1>	キル	キータ	キン	キヨー	キルナ/キナ	キー
	○●	●○○	○●	○●●	○●○／●○	●○
2V2<1>	ミル	ミタ	ミン	ミヨー	ミルナ	ミー
	○●	●○	○●	#○●●	○●○	●○
2V1<5>	オク	オイタ	オカン	オコー	オクナ	オケ
	○●	●○○	○●●	○●●	●○○	●○
2V2<5>	カク	カイタ	カカン	カコー	カクナ	カケ
	○●	○●○	●○○	●○○	○●○	#●○
		#●○○	#○●●	#○●●		
2V3	オル	オッタ	オラン	オロー	オルナ	オレ
	●○	●○○	○●●	●○○	●○○	●○
3V1<1>	ウエル	ウエタ	ウエン	ウエヨー	ウエルナ/ウエナ	ウエ
	○●●	●○○	○●●	○●●●	○●○○／●○○	○◐
3V2<1>	オキル	オキタ	オキン	オキヨー	オキルナ/オキナ	オキ
	●○○	○●○	●○○	#○●●●	○●○○／○●○	○◐
	#○●●	#●○○	#○●●			
3V1<5>	アタル	アタッタ	アタラン	アタロー	アタルナ	アタレ
	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○
			#○●○○			
3V2<5>	イノル	イノッタ	イノラン	イノロー	イノルナ	イノレ
	#○●●	●○○○	○●○○	#○●●●	●○○○	#○●○
		#○●○○	#○●●●		#○●○○	
3V3	アルク	アルイタ	アルカン	アルコー	アルクナ	アルケ
	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○

【表８】将来の木頭村における動詞音調体系（2V・3V）

	終止・連体形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
2V1・2<1・5>	○●	●○	○●	○●●	○●○	●○
		●○○	○●●			
3V1・2<1・5>3V3						
	○●●	●○○	○●●	○●●●	○●○○	○◐
		○●○○	○●●●	○●○		
2V3	●○	●○○	○●●	●○○	●○○	●○

た体系が想定される．

それによれば，将来2V3は別として，終止・連体形をはじめ，否定形・意志形は0型になり，過去形は句末から3拍めに核のある(－3)型，ただし2拍のキタ・ミタの場合は(－2)型になる．命令形は(－2)型で，2拍の場合は末尾拍内下降にもなる．禁止形は終止・連体形が生かされて，3Vではさらに○●●○となって，(－2)型にまとまるのではないか．2V3は「居る」1語であるが，なおしばらく衰えそうもないようである．

木頭村の動詞アクセントが，【表4】の年配層の体系から【表7】の若年層の体系を経て，【表8】のごときものに収束していくとすれば，これは式の消滅に連動した一型化の変化と解釈できる．

なお，中井(1991)に3V2<1>よりも3V2<5>の変化が早かったらしい旨の考察があるが，変化がはじまったばかりの木頭村では，両方に変化形が出現し，いずれが先かはわからない．あるいは同時か．

4．木頭アクセントの成立

木頭村のアクセントはいかにしてできたのか．山口幸洋(1988)など東京式との接触を考える立場もあり，近畿の垂井式について奥村三雄(1990 p.265)も「乙種の影響で高起式／低起式の対立が失われたもの」とされる．しかし，四国山地東端にあるC式については，遠く四国西南端の東京式と関連づけて説明するより，南または東に隣接する近畿中央式から変化したとみる方が自然ではなかろうか．これらに対応関係が顕著であること，すでに見たとおりである．

木頭村のような音調は，たとえば中央式の●●●や●●○がはじめの1拍分を低くして○●●や○●○となる方向に変化が進んで成立したと説明できる．この変化はきわめてふつうにあること，金田一春彦(1947 pp.26-27)に述べられるが，一般の垂井式は逆に○●●が●●●になる．このような変化について，金田一は型の合流変化であることを述べ(pp.30-31)，上野善道(1987 p.55)は「有標項と無標項との対立が失われる(中和する)場合には 無標項の方に合流する」という普遍的傾向を指摘する．その点，木頭村(すくなくとも年配層)のアクセントは，高知などの高起式に対応する型が無標化した段階であり，一方で低起式は，これを残す人も年配層に多いのではないか．その低起式が徐々に失われて，式の対立そのものがなくなるという，その過程に現在の木頭村はある，と解釈する．木頭村の若年層は，少なくとも動詞の場合には式の対立を失って，2類動詞に1類への類推変化が起こりつつある．

筆者は，この動詞にみられる類推変化の有無を，式の統合消滅の指標と考え

2V1<5>	オク	オイタ	オカン	オコー	オクナ	オケ
	○●	●○○	○●●	○●●	●○○	●○
2V2<5>	カク	カイタ	カカン	カコー	カクナ	カケ
	○●	○●○	●○○	●○○	○●○	○◐

となっており，両者の差異ははっきりとしているが，若年層では2V2<5>が2V1<5>へと類推変化して，

2V1<5>	オク	オイタ	オカン	オコー	オクナ	オケ
	○●	●○○	○●●	○●●	●○○	●○
2V2<5>	カク	カイタ	カカン	カコー	カクナ	カケ
	○●	●○○	○●●	○●●	○●○	●○

たい．すなわち，年配層の場合では，たとえば2V1・2<5>を比較してみると，のような体系へと落ち着こうとしている．もっとも禁止形がオクナ●○○とカクナ○●○とで異なるが，これは禁止の助詞ナが終止・連体形接続であることを思うと，古い終止形に接続した形のオクナ●○○よりも，カクナ○●○の方が，終止・連体形が統合して○●になった場合には，よりふさわしいといえる．だから，禁止形に限っては2V2<5>も簡単に2V1<5>にならうわけにはいかなかったものと考えられる．いずれは，むしろ○●○になるのかもしれない．また命令形○◐が●○になったのは2拍名詞第5類にみられた変化と同じとも考えられるが，3V1・2<1>の命令形ウエ・オキが○◐のままであるから，ここでは2V1<5>命令形オケ●○への類推とみておく．

事情は3拍動詞でも同様であるが，このような類推変化がなぜ起こったかが問題である．またそれは同時に，年配層になぜ類推が起こらなかったか，を問うことでもある．動詞の活用形で最も力のあるのは連用形であるが，これが●○(過去形オイタ●○○)と○●(過去形カイタ○●○)のように明確な差異をもつのに，それさえも抑えて類推がこの時期に働いたのは，式の統合消滅の完成以外に理由を求めることはできないであろう．

すなわち，木頭村では年配層で高知などの高起式に対応する，高く起ころうとも低く起ころうとも制約のないものと，低く起こらなければならない低起式との過渡的対立があった．これはたしかに式の統合消滅への第一段階であるが，しかしなおその段階でも不完全ながらも両者の対立は辛うじて保たれていた．だから動詞アクセント体系も変化しなかった．しかし，若年層ではこれらの対立が完全になくなった．そこでオク○●(0型)とカク○●(L0型)とを区別することができなくなり(ともに0型)，類推がはじまったものと解釈できよう．

それではなぜ2類動詞が1類動詞の方へと動いたのか．3拍動詞の場合など

2類の方がその数が多いこと，木頭村でも事情は変わらないであろう．たしかに2類動詞の方へもわずかながら動く気配があるらしいことは，若年層で3V1<5>否定形がアタラン○●○○となっていて，○●●●よりも3V2<5>イノラン○●○○に類推しているところに窺えるが，大勢はやはり1類動詞の方へと動いている．それは，3類のアルクなど数語が1類と統合して少し勢力を増したこともあろうが，なによりも有標の低起式が無標化していくことと無関係ではない．これは2類動詞が1類動詞に近づいていく動きである．その故にこそ，数が拮抗ないしは逆転していても，それを超えて類推がはたらいたものと考えたい．

したがって，式の区別が完全に統合消滅したということは，木頭村の場合には若年層に至ってはじめて確認できることであろう．それまでは，高知などの高起式に対応する，起こり方に制約のないものと，低く起こることを主張する低起式とが緩く対立している状態(前C式)ではないかと推定する．

もちろん森らの調査結果から，C式であっても動詞アクセント体系に変化のない状態を，C式で同じく変化のある状態やB式との中間に位置づけることも可能である．

ここで，木頭アクセントの祖は，南の高知アクセントか，東の阿南・羽ノ浦に以前使用されていたアクセントか，について一応検討をしておきたい．いま【表9】をみると，3V3で木頭アクセントが高知に一致することがわかる．しかし，だからといって高知を木頭のもとのかたちだと断定はできない．阿南・羽ノ浦なども遠くない過去に高知のようなアクセントをもっていたであろうこと

【表9】高知市・阿南市・羽ノ浦町と木頭村年配層との比較（2V3・3V3）

2V3	オル	オッタ	オラン	オロ/オロー	オルナ	オレ
高知	●○	●○○	●○○	●○	●○○	●○
阿南/羽ノ浦						
	●○	●○○	●●●	●●●	●○○/●●○	●○
木頭	●○	●○○	●○○	●○○	●○○	●○
			○●●			
3V3	アルク	アルイタ	アルカン	アルコー	アルクナ	アルケ
高知	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○
阿南/羽ノ浦						
	○○●	○●○○	○○●●	○○●●	○●○○	○●○
木頭	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○

は容易に想像されるからである．

それでは，2V3はどうか．ここにオランが木頭で●○○と○●●と両様に聞かれることに注意したい．そして，●○○は高知のアクセントに一致し，○●●は阿南・羽ノ浦の●●●に対応する．ただし，ここで木頭の○●●は，2V1<5>オカン○●●への類推が働いた可能性もあること，すでに述べた．

しかし，木頭でオローが●○○に聞かれ，それが高知のアクセントに一致するのは注目される．阿南・羽ノ浦に対応するなら○●●という音調があってよいはずであるのに，これについてはまったく聞かれない．(7)

高知県側の山間部を調査せずに推定するのは危険も大きいが，少なくとも木頭村の年配層に聞かれるアクセントから推定するかぎりは，高知のアクセントとの関係も，那賀川下流域の阿南・羽ノ浦と同様，重視する必要がある．

5．おわりに－アクセント史における意義など－

木頭村年配層のアクセントが，その近隣の近畿中央式アクセントとよく対応することはすでに述べたとおり．そして，その中央式アクセントがそのまま木頭村のC式アクセントの祖形と考えられる古いタイプであることは，近畿地方の垂井式などとは異なる特色である．その点で，中井(1991 p.20)が京都府下のC・B式への変遷を「かなり前」のことと推定するのに対して，木頭などの場合はさほど以前のことではなく，実際に現在変化の途中である．

そこで，今度は逆に対応の例外から近畿中央式の方の古い姿を推定しようと考える．すなわち，木頭年配層のようなアクセントに，近隣の近畿中央式(高知あるいは阿南・羽ノ浦)アクセントから分派した当時の中央式アクセントが反映していないかどうかを考察しようというものである．

アクセント史では近世後期以降3拍動詞を中心に類推変化が起こり，その体系が一変したが，すでに見たとおり木頭アクセントは，変化以前の体系に対応している．

同様なことは，3拍形容詞ク活用の類別についてもいえる．生田(1951 表II)では，これらはともに●○○とされるが，今回の調査では第1類カタイ○●○，第2類セマイ●○○であって動かない．森(1958・1982)が第1類を●●○とするが，少なくとも木頭まで含めて，その代表的音調とするのには躊躇する．

ほかにたとえば，4V2<5>「動かす」を阿南・羽ノ浦では●●○○というが，これについて木頭の年配層からは●○○○とばかり聞かれる．●●○○が

(7) 木頭村よりひとつ下流の上那賀町平谷では，オラン●●●，オロー●●●．

伝統的なかたちであるが，徳島市などでは年配層で●●○○と●○○○と両様.

ところが逆に，木頭でこの否定形ウゴカサンは○●●○○と発音される．これは阿南・羽ノ浦では●●○○○となり，史的に推定される●●●○○はむしろ木頭アクセントに対応しているということになる.

また4拍形容詞などは，アクセント史上室町以後からは類別が乱れて一型化が徐々に起こるようであるが，徳島市でも「悲しい・苦しい」など，いずれも●●●○・●●○○，ときには●○○○とも発音される．しかし，これについては木頭も同じで○●●○と○●○○と両様に聞かれる.

このほか，低起式早上がり型が，ウサギ○●●，アルク○●●，カカエル○●●●などと聞かれることにも注意されよう.

以上，本稿では木頭村の年配層から若年層へと，アクセント体系が変化することに着目して，木頭アクセントの成立などを検討してきた．こうなると，近辺の山間部のアクセントが気になるし，またそれを調べなくては木頭アクセントも位置づけられない，ということになるが，ひとまず木頭は木頭として，その年齢層による差異を明確にして解釈を加えた.

なお，この調査には先に掲げた方々のほかに，関連する地域の調査結果も使用している．協力をいただいた方々の御氏名(敬称略，括弧内は生年と出身町・字名)を掲げて御礼申し上げたい.

阿南市:富永照美(1928 長生町)，樫原文雄(1931 椿町)，近藤邦昭(1931 大野町) の諸氏.

羽ノ浦町:那住兵太郎(1914 中庄)，竹治貞夫(1919 古毛)，岩瀬平五郎(1924 中庄)，田中久夫(1928 中庄)，田中公(1939 中庄)の諸氏.

上那賀町:西泉一男(1924 小浜)，川原信子(1925 平谷)，府殿捷吉(1939 海川)，川岸逸朗(1944 平谷)，猪本勝代(1944 平谷)の諸氏.

また，木頭村教育長佐々木武夫氏，木頭中学校長南欣和氏，上那賀町教育長宮本明氏には，被調査者の紹介など格別の御高配をたまわった．ここにあわせて感謝申し上げる.

【参考文献】

生田　早苗(1951)「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局

上野　善道(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42-1

奥村　三雄(1990)『方言国語史研究』東京堂出版

金田一春彦(1947)「語調変化の法則の探究」『東洋語研究』3
佐藤　栄作(1989)編『アクセント史関係方言録音資料』アクセント史資料索引別冊　アクセント史資料研究会
中井幸比古(1990・1991)「京都府における，いわゆる垂井式諸アクセントについて(1)・(2)」『国語研究』54・55
森　　重幸(1958)「徳島県のアクセント概観」　『国文論叢(神戸大)』7
　　(1982)「徳島県の方言」　『講座方言学8-中国・四国地方の方言-』国書刊行会
山口　幸洋(1988)「垂井式諸アクセントの性格」　『国語学』155